

2 定量的検査方法

採痰容器の液量器に紙蓋を作り、之で蓋したまゝ乾熱滅菌を行つた後患者に分配し、1日の喀痰を全部その中に喀出させる。

液量器の読みにより膿状部、水様部、泡沫部の量を測り、膿状部の極微量を採り直接塗抹標本を作る。

10%第三磷酸ソーダ液 ($23\% \text{Na}_3\text{PO}_4 \cdot 12\text{H}_2\text{O}$) を喀痰全量と等量に加へ滅菌割箸で良く混和した後大型の滅菌コルベンに移し 37°C に加温しつゝ良く振盪し完全に内容が均質化する迄加温振盪を繰返す。(喀痰の性状により溶解に難易がある) 溶解後は 37°C の孵卵器に収め磷酸ソーダ液作用時間1時間にて取り出し直ちに岡・片倉培地に一定の標準白金耳量を一定方法にて塗抹し封蠟培養する。又同時に同一白金耳量を面積1平方糎の円を2箇記した物体板の円内に夫々可及的均等に塗抹する。(溶解不十分な喀痰では平等に塗抹することが出来ない。又この時は必ず培養も雑菌の爲に不成功に終る) 標本は孵卵器内で正しく水平に置き乾燥させる。軽く火焰固定の後染色鏡し抗酸性菌の数を計算する。

培地は4週間後のコロニー数より全痰のコロニー数を計算する。

ガフキー号数の多い喀痰は孤立のコロニーを得る様予め稀釈した後培養する。

ガフキー I 号以下の際は集菌法を併用する。この際沈渣をそのまま培養したのでは雑菌の発育が非常に多いから沈渣に対して硫酸水を作用せしめて後培養する。

10%第三磷酸ソーダを用ひる上に特に冬季は室温が低い爲に喀痰の溶解が不十分で失敗を招き易いから入念に加温振盪混和することが大切である。

3 「メチルメタクリレート」吸入による喀痰中結核菌の消長に就て

紙面の都合で吸入例中良好な経過を得た1例を掲げた。(前頁参照)

定量的検査によつて次の知見を得た。

- a 本吸入による菌陰性化の経過を詳細に把握出来た。
- b 本吸入によつて極めて良好な治療成績を得る例を認めた。
- c 本吸入の患者でガフキー II 号以上の排菌中の経過に於ては喀痰中結核菌の消長はそのガフキー表に概ね平行する。又この際は週1度乃至2度の喀痰検査で排菌状況の概要を把握することが出来る。
- d 本吸入によつて結核菌の減少消失した症例中には経過中に喀痰中結核菌の一部は通常の菌体でなく抗酸性顆粒の配列として認められ、更に菌減少と共に抗酸性顆粒の集合体として出現する様になり、しかもこれ等の大多数は白血球中に在る例を認めた。1例ではあるがこの様な抗酸性顆粒集合体のみがガフキー I 乃至 II 号程度に認められ、通常の結核菌が全く見られない時期を観察し得たがこの場合の定量培養成績は陰性か又は極めて少数の結核菌コロニーを得るに止まつた。即ちこの時期の抗酸性顆粒集合体は本法を施した場合岡・片倉培地に結核菌コロニーを生ずる丈の増殖力を殆んど或は全く失つて居ることを知つた。

頑固な寒冷蕁麻疹を伴える結核初感染例に就て

辻 周 介
米 津 徹 也

結核感染に依つて個体の外界の刺激に対する感受性乃至反應能力にいかなる変化が起るかは体質と結核の Anfälligkeit 乃至は Hinfälligkeit との關聯性を知る上に興味深い問題である。初感染と共に Tuberkulinallergie の起り方にも人によりいろいろある。中には感染していると思はれるのに却々

「ツ」反応が陽轉せず又は陽轉しても甚だ程度の弱い人も屢々ある。この様な性質が個体の抗体発生能力又は体質学的な過敏性の程度と一應平行関係にあることが知られて來た。この「ツ・アレルギー」の様な特異反應に対してのみならず他の種々の非特異性刺激に対する個体の反應力が結核感染を境として変化するものかどうかは矢張り結核の体質学的な研究の上に興味ある問題である。

我々は最近結核感染後蕁麻疹を頻發する様になつた5例の症例を得たのでその病歴の概略を報告し一應の考察を加えてみたいと思う。

症 例 及 性	年 令	家 族 中 の 同 症 状	既 往 の 過 敏 性 症	時 「ツ」 反 應 陽 轉	蕁 疹 陽 轉 後 の 年 数	体 温	体 格	栄 養	肺 の 「レ」 所 見	「ツ」 反 應	赤 沈 (一 時 間)	エ オ ジ ノ フ イ リ	蕁 疹 發 生 部 位	関 節 痛	誘 因	植 物 神 經 緊 張
1♀	18	無	+	16才	1年以内	高熱	細長	やや減退	兩肺上部増殖性陰影右横隔膜癒着	25×30 二重發赤	120	24%	全身殊ニ頸部	+	極温又ハ 寒	ワゴト ニー
2♀	26	母妹	+	22才	1年	微熱	肥満	やや減退	著變無	30×40 二重發赤	60	19%	頸部四肢 露出部位	+	寒	冷
3♀	20	母姉	-	16才	2年	平温	肥満	平常	≡	30×30 二重發赤	13	14%	五肢頸部 顔面	-	極温又ハ 寒	冷
4♂	19	無	+	17才	3カ月	≡	細長	≡	≡				四肢	-	寒	冷
5♂	32	無	+	14才	2年	≡	≡	≡	≡				四肢		器械的 刺激	

表示する如く年齢はいづれも20才前後の青年（第5例は症状のあつたのは15～17才）である。症例2及3は姉妹で、母が矢張り頑固な蕁麻疹を出しやすいとの事である。既往の過敏性症状として、症例3以外は幼少より濕疹や蕁麻疹や限局性の浮腫等を來したことがある者が多い。「ツ」反應陽轉してより早い者で3カ月、遅い者で2年経つてから、頑固な反覆性の蕁麻疹を發生する様になつた。その發疹は症例1～4は大体寒冷に接した場合に、多くはその露出部位に、又時にはそれが拡がつて全身に發生する。夜間就褥中寒いと感じた時に多く出るとか又は洗濯をしたり寒風にさらされたりしても容易く發生するという。症例5は器械的な刺激による場合が多く、柔道の選手であつたが寝技をすると直ぐその摩擦部位に發生したという。この様な蕁麻疹が陽轉後3～4年になつても尙反覆してあらはれて來るのである。

結核性疾患に就いては、症例1は兩肺上部に軽度の撒布竈と左胸膜癒着が認められる。第2, 3, 4は肺所見はない。第5は現在（34才）は兩側空洞性肺結核であるが、蕁麻疹の發生したのは15～17才の時であつて、当時は恐らく大した所見は無かつたであらうと考へられる。即ちいづれも結核性疾患としては無所見乃至は軽度の部類に属するものであることに注目したい。現在尙蕁麻疹を出しやすい1, 2, 3の3例はいづれも「ツ」反應強陽性でありいづれも「エオジノフィリー」を伴っている。又症例1及2では著明な「ワゴトニー」の状態を呈していた。

以上の如く「ツ」反應陽轉後1～2年以内に、かねて過敏性体質の傾向を有していた人に多く、寒冷を誘因とする蕁麻疹を發生し、頑固に反覆する状態を起して來た。この様な状態の出現が直ちに結核感染と関係があるとする証拠はないわけであるが、私は之を結核感染に伴う「パラレルギー」の上昇と考えたい。

寒冷蕁麻疹の成因に就ては今日尙明かでない。併し蕁麻疹なるものが局所血管神経の異常反應を基盤とするものであることは間違いない。即ち皮膚血管神経の異常興奮状態にある者に、特殊な刺戟が加はつた場合、ここに蕁麻疹として反應するのではなからうか。この刺戟として特殊抗原抗体反應即ち「アレルギー」現象に伴う自律神経毒でもよからうし、又非特異的な「パラレルギー」性の刺戟でも又場合によつては寒冷温暖その他器械的刺戟でもよい場合があらう。

元來結核性患者の植物神経機能に就いては、大体、輕症者に於てはその緊張亢進状態を、次で重症に移行するに従い低下を來すことが知られている。此處に報告した患者は幼少の時から種々の過敏性體質の性質を示しておつた者が多く、此の様な體質学的な傾向に加えて、思春期という植物神経機能の動搖しやすい時期に入つて結核感染をうけ之等が相加はつて著しい植物神経機能殊に皮膚のその亢進を來したものと考えられる。之に對し寒冷に基く特殊の何か不明の誘因が加はり、反覆性の蕁麻疹を來したのではないかと考えられる。尙この様な植物神経機能の異常亢進状態は結核症に對しては惡影響を與えるものではなく、むしろ結核症の進展を抑制するものではないかと考えられるが、之に就ては更に多数の症例を重ね且更に長期間の觀察を要すると考える。

主 要 文 献

- 1) 伊藤実 グレンツゲビート 1号 昭和9年
- 2) 岩崎基 日本臨床結核 1卷 3号 昭和15年